



ちひろ 心のふるさと 信州

●2026年3月1日(日)~6月7日(日)

主催：ちひろ美術館 後援：信濃毎日新聞社、市民タイムス、abn 長野朝日放送、長野エフエム放送株式会社

ちひろが「心のふるさと」と親しんだ信州。父親が長野県南安曇郡梓村（現・松本市梓川）、母親が松本市新橋の出身だったこともあり、ちひろも幼少のころから信州に足を運んでいました。戦中戦後は松本に疎開し、その後両親が住むようになった松川村にもたびたび足を運びました。画家として活躍するようになってからは、黒姫高原に山荘を構えて制作の場とし、都心を離れた生活を送る場所として信州との縁を深めています。本展では、アルバムの写真も交えながら、ちひろにとって信州がどのような場所であったかを紹介します。

ちひろの山行き

山好きの両親に育てられたちひろは、幼いときから北アルプスの山に登っていました。第六高等女学校での林間学校や、家族旅行でも山に通っています。

1951年に松本善明と結婚したちひろは、新婚の夫を白骨温泉や大町市にあった大町スキー場に誘っています。息子が生まれてからも雪山に足を運び、スケッチを重ねながら自らもスポーツを楽しみました。雪やスキーをする子どもたちを描いた作品も多くみられます。「スキーをする子ども」もそのひとつです。（図1）



図1 いわさきちひろ スキーをする子ども 1973年
「ここは私の故郷」、松川村

松川村は、ちひろの両親が戦後開拓農民として入植した村です。1952年、画業と子育ての両立が難しくなったちひろは、松川村の両親のもとに、生後間もないひとり息子・猛を預けていた期間がありました。ちひろは次のように文章に残しています。

「ここは私の故郷

年老いた貧しい両親が
遠くはなれているその娘に、今年もまた
ひとすじの希望をかけて住んでいる」

現在は安曇野ちひろ美術館が建つこの村は、信州のなかでも特に、ちひろにとって思い出深い土地であったでしょう。風景を記録するように、ちひろは多くのスケッチを残しました。「神戸原のやぎ」（図2）には、野原で草をはむやぎ

の姿が描かれています。やぎは松川村では親しみのある動物で、猛もやぎのお乳を飲んで育ったといえます。



図2 いわさきちひろ 神戸原のやぎ 1950年6月15日
信州で親しんだもの

ちひろの母方の祖母はそば打ちの名人であり、ちひろ自身もそばの食通だったようです。敬愛する小林一茶の詩「信州は月と仏とおらがそば」を時折口にし、立ち食いそばを指して「あの、ゴムを食べているような感じはどうもそばというものとはちがうわね。」と話しました。1951年からヒゲタ醤油の広告の仕事をしていたちひろは、そばを食べる少年少女をたびたび描いています。（図3）



図3 いわさきちひろ そばを食べるフリルスカートの子 1964年

りんごも、信州の味として欠かせないものでした。ちひろは波田村（現松本市）のりんご園のデッサンを描いています。「信州のおばあちやまからおくれた りんごと柿」とメモが残された、東京の自宅で撮影された写真（図4）からは、東京にいても信州の味覚を日常に迎え、楽しんでいたことがうかがえます。



図4 東京 上井草の自宅 1957年(推定)

信州で描いた絵本

信州の風土を愛したちひろは、絵本に

も信州の自然を取り入れました。

小谷温泉で描かれた『りゅうのめのなみだ』（1965年）（図5）のなかで、男の子が山に向かうシーンがあります。画面の右下、男の子の近くに木が描かれていますが、ちひろがスケッチをした「小谷温泉 枯れ木」（図6）にとても似通っていることがわかります。ほかのシーンでも、ノリウツギや倒木のスケッチが絵本づくりに活かされていることがわかります。



図5 いわさきちひろ 山に向かう男の子「りゅうのめのなみだ」（偕成社）より1965年



図6 いわさきちひろ 小谷温泉 枯れ木 1965年8月

『あかまんまとうげ』（1972年）（図7）では、物語のなかにすみれが登場します。一度絵を描き上げたちひろは、出来上がりに満足ができず、次の春のすみれの季節を待って絵を描き直しました。そのときも信濃町黒姫にある山荘の近くで実際にすみれを見て絵を描いたといえます。普段から散策をする際には、スケッチブックを欠かさなかったちひろのこだわりが感じられます。

（山本理乃）



図7 いわさきちひろ わらびを持つ少女「あかまんまとうげ」（童心社）より 1972年

96才、画家。ユゼフ・ヴィルコン。ーポーランドの巨匠ー

●2026年3月1日(日)～6月7日(日)

主催：ちひろ美術館 後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会 協力：ポーランド広報文化センター



ユゼフ・ヴィルコンは、1959年以来、現在までに200冊近くの絵本を手がけてきました。その個性的で芸術性の高いイラストレーションはポーランド国外の出版社の目に早くからとまり、1960年代以降ドイツやフランスの出版社から絵本が次々と出版されました。日本でも1970年代以降、30冊以上の翻訳絵本が出版されています。海外での知名度の方が高かったヴィルコンですが、2000年代以降はポーランド国内でも復刊や出版が続き、2006年にはワルシャワの国立美術館において大規模な展覧会が開催され、まさにポーランドの巨匠といえます。(図1)



図1 ユゼフ・ヴィルコン ©Bogdan Sarwiński

本展は、2001年に開催した「ユゼフ・ヴィルコンの世界～音を奏でる色とかたち～」以来、安曇野ちひろ美術館では25年ぶりの個展となります。当館の所蔵する、ヴィルコンの作品約130点のなかから、約90点を技法の変遷に注目して紹介します。

液体の実験

ヴィルコンは自らの画業を、その技法から、いくつかの時期に分けられると説明しています。その最初となるのが、1957年から1963年にかけての「液体の実験」の時期です。フランスを中心に、ヨーロッパの美術界で1950年代に起こった、タシスム^{*}などの表現に関心をしめた彼は、絵本のイラストレーションにその手法を取り入れます。

『あるクジャクの冒険』(図2)では、羽根の模様が細かい絵の具の染みや



図2 『あるクジャクの冒険』より 1963年

広がりであらわされており、水彩絵の具の「実験」をしていることがうかがえます。

日本の絵画にも影響を受けたと語るヴィルコンは、水彩の濃淡を生かして、奥行きを表現しています。絵本『ミンケパットさんと小鳥たち』では、カラーのページとモノクロのページが交互に使われていますが、森のなかの場面(図3)には、雪の光と木々の影のコントラストが、水墨画のような味わいを出しています。



図3 『ミンケパットさんと小鳥たち』より 1965年

パステルの質感

1970年代後半からは、ヴィルコンはパステルを用い始めます。絵本『ブラウンさんのネコ』(図4)では、パステルの色の重なりによって、ブラウンさんの横に寝そべる、トラに変化していくネコのつややかな毛並みや、ベッドのあたたかさ、月夜のやわらかな光を表現しています。



図4 『ブラウンさんのネコ』より 1987年

子ども時代に自然豊かな環境で育ち、今も動物たちを愛するヴィルコンは、繰り返し動物を描いています。彼の苗字である Wilkoń(ヴィルコン)は、wilk(狼)と koń(馬)という二つの動物からなっていることもあり、狼や馬には特別な想いがあるようです。どの動物に似ていると思うかと問われると、自分の鋭い目は狼の目と似ており、また、広くて大きい鼻はライオンに似ているとも語っています。『イタチの襟巻をしたトラ』では、トラ以外にも、さまざまな動物が登場しますが、そのなかのライオンは、どこか画家自身に似ています。(図5)



図5 『イタチの襟巻をしたトラ』より 1989年

空間イラストレーション

ヴィルコンは、絶えず新しい表現方法を模索しながら創作を続けてきました。1996年ごろにドイツから親しい編集者とその家族が彼のアトリエを訪ねてきたときに、子どもたちと木の動物を遊び半分で作ります。後日なにげなく見直し、これを写真に撮って、絵本のイラストレーションにする「空間イラストレーション」を思いつきます。筆のかわりにノコギリを手に、犬、猫、魚、鳥などが生まれていきました。

「木材が大好きだ。柔らかく、自在に変化し、気高くもある。そして、ノコギリで切ることも、斧を振り下ろすことも。」と語るヴィルコンは、「彫刻」に出会い、制作の幅を広げます。

安曇野ちひろ美術館に常時展示され、来館者を迎えてくれる「アフリカン・ブルース」(図6)もそのひとつです。使い古した戸棚で、アフリカの生き物たちが、さまざまな楽器を演奏しています。狩猟で追われる運命にあるサイや象などの生き物の悲しみをも伝えています。



図6 アフリカン・ブルース 1995年

次第に大きい動物への制作意欲がわいたヴィルコンは、ライオンやバイソンなど、実物より大きい作品も手がけています。2006年の個展を機に制作した、「ノアの箱舟」という彼の今までで最も大きな作品(約5m×10m)は、現在ワルシャワ郊外のラジェヨヴィツェ宮殿の公園に設置されています。

冒険を続けてきたヴィルコンの作品の数々をお楽しみください。(松方路子)

*キャンバスに絵具を垂らした色斑で表現する絵画の技法

ちひろ美術館コレクション 世界に生きる動物たち

●2026年3月1日(日)~6月7日(日)

主催：ちひろ美術館

世界の絵本画家たちのなかには、動物を好んで描いた画家や、何度も自然のなかに足を運び、そのスケッチや記憶を頼りに制作した画家がいます。本展では、ちひろ美術館コレクションのなかから、世界各地の森や島々に生息する動物が描かれた作品を紹介します。

ヤヌシ・グラビャンスキは、若いころから動物の観察とスケッチを繰り返すなかで、動物の瞬間

の動きや表情を巧みにとらえるデッサン力を養いました。『カヤのための詩』(図1)では、東洋の水墨画にも



図1 ヤヌシ・グラビャンスキ(ポーランド)『カヤのための詩』より 1969年

通じる勢いのある筆さばきで猫を描いています。実はいわさきちひろも彼の動物画を好み、絵本を大切に持っていました。

マイ・ミトゥーリッチは、動物の写生をするためロシア中をめぐ



図2 マイ・ミトゥーリッチ(ロシア)『コマンドルの島じま』より 1968年

『コマンドルの島じま』(図2)には、エトピリカだけが住む小島やオットセイの住処があるコマンドル諸島の自然が描かれています。ミトゥーリッチの大胆な水彩のタッチは、細部を描きこまずとも動物の特徴をよくとらえています。



図3 あべ弘士(日本)『ライオンのながいいちにち』(佼成出版社)より 2003年

あべ弘士は、北海道の旭山動物園で25年間、飼育員として勤務した経歴もっています。動物園を退職した後は、自然のなかに生きる動物本来の姿を観察するため、世界各地を旅しながら絵本を描きました。『ライオンのながいいちにち』(図3)では、画家が何度も訪れたアフリカのサバンナを舞台に、野生動物を大胆な筆致と鮮やかな色彩で描いています。

(川澄祥)

●活動報告

2025年10月4日(土) 司修講演会「ヒロシマ トマト」

絵画や絵本をはじめ、書籍の装丁、小説、エッセイ、脚本など幅広い表現活動をしてきた司修さん。「ヒロシマ・トマト 司修展」に関連し、司さんの講演会を開催しました。一部を紹介します。

(上島史子)



司修『まちゃんと』(偕成社)より 1978年/1983年

ヒロシマ トマト

僕がいろんなことをしてきたのは、やはり精神的な飢えです。中学を卒業してすぐ就職して、若いときに勉強できなかったのも、おもしろそうだと思うとなんでも飛びついてしまう。でも、ある意味で、これはほくの宝物だと思うのです。

娘の誕生がなかったら絵本は描いていなかったかもしれません。娘の成長の過程で絵本というものを教えられたんですね。娘が大きくなると、今度は自分のなかの子どもにむけて描くようになりました。幼いころの経験はほとんど忘れていくけれど、心の底のほうに沈んだままでいるものがたくさんあると思うのです。あるときそれがふっと出てくる。

自分の原点はやはり戦後の焼け跡での経験です。1942年に僕は健康優良児に認定されて、二宮金次郎の銅像を記念品にもらいました。この年というのは日本が真珠湾攻撃をした年なんですよ。つまり二宮さんの像は、近い将来、立派な兵隊になる印だった。母も喜んじゃって、僕もにこにこして写真に写っていますけど。これから大きな戦争があつてヒロシマ・ナガサキに原爆が落とされるなんてだれも考えていない。

戦後7年目に峠三吉と山代巴が広島の子どもの詩を集めた『詩集 原子雲

の下より』(青木文庫)が刊行されました。この詩集は松谷みよ子さんからお預かりした絵本『まちゃんと』の原稿の絵が難航していたころに買って、助けを求めように何十回も読んだんですよ。

「よしちゃんが/やけどで/ねていて/とまとが/たべたいというので/お母ちゃんが/かい出しに/いつている間に/よしちゃんは/死んでいた/いもばっかしたべさせて/ころしちゃったねと/お母ちゃんは/ないた/わたしも/ないた/みんなも/ないた」*1

私は幼い子の書いたこの詩の「よしちゃん」との出会いで、『まちゃんと』のイメージもつかむことができたし、今回の展覧会でも、この少女の感じた原爆をイメージできたらと「ヒロシマ トマト」という言葉を考えつきました。

子どもたちの原爆の詩を何度も読みかえすうち、彼らの詩にあらわされた願いは、原爆の悲劇を感じさせるためではなく、なにげない日常の持続である「平和」であり、両親や兄弟、仲間たちとの「愛」だ、ということに気づきました。

幽霊戸籍

僕はNHK広島局からテレビドラマのシナリオを依頼され、無謀にも引き受けました。取材のため広島映画社の田邊さんに案内されて、お好み焼き屋でYさ

んにお会いしました。「ドラマにするって、原爆をどう扱うつもりですか。」と問われ、私は答えられませんでした。原爆瓦の発掘を続けていたYさんは、被曝直後、母の肋骨と繋がった腕を掘り出したそうです。「私は戦争と離れられなくなった」といわれました。

そのYさんから「幽霊戸籍」の存在を聞き、強く惹かれていきました。幽霊戸籍とは、広島市が空襲を避けるため、戸籍簿を比治山の文徳殿に疎開させていたので、破壊し尽くされた後も戸籍簿が存在したために生じたものです。一家全滅でだれもその家族の死を証明することがなければ、戸籍上で生き続けてしまう。行方不明のままなら、死んだことになってしまうのです。

「ドラマ 空白の絵本」*2では、被曝という現実を避けて生きてきた主人公が、初めて人生における大きな問題に向き合い、高校生の娘と広島に向かいます。平和公園で娘が会った大道芸人のセリフに「生きているのに生きてない」というのがあります。幽霊戸籍を感じさせることばです。母娘は被曝校舎の残る本川小学校平和資料館も訪れます。

ドラマのラストシーンで、主人公が広島の実を自らのものとして、伝えてい



く人間となるのを描きました。この主人公は、「まちゃんと」と鳴いて飛んでいる小鳥と想っていたらと幸いです。

*1 無題 小学五年 佐藤智子 『詩集 原子雲の下より』(青木文庫 1952年)より

*2 「ドラマ 空白の絵本」(1991年)から30年後、新たに小説『空白の絵本一語り部の少年たち』(司修著 鳥影社 2020年)が出版された。

ひとこと
ふたこと
みこと



8月1日(金)

『窓ぎわのトットちゃん』、中学生のときに読みました。こんな子がいたら楽しいな、と13歳の私は思いました。子の母となり、孫のばばとなり、「トモ工学園」が今こそ必要なときです。強く思います。すべての子どもと昔子どもだった大人へ。あなたのとりの人を大切にしましょうネ♡感謝

8月8日(金)

ちひろさんの絵は、見たことがある程度に知っていました。でもすごくきれいでした。こんな絵をたくさんの人に伝えていきたいな、と思いました。子どもたちのいろんな表情や動きが伝わってくるようでした。大人になったら、感想もちがうのかもしれない。待ってください。(笑) Hちゃん

8月25日(月)

ヨーロッパ・オーストリアより、シルクロード経由で2か月かけて陸路で来ました。これから同じく2か月かけて、今度は東南アジアを経由して戻ります。その際、旅で出会う人々にちひろさんの作品をプレゼントしていきたいと思っています。 松川大地

9月14日(日)

約20年ぶりに訪れました。20年前は小さかった息子と娘の4人で、今日は妻と2人で。息子は10月に挙式、娘は学生生活も残り1年ほど。息子も娘も、それぞれの人生のなかで、再びちひろ美術館に訪れてほしいものです。

10月9日(木)

憲法が変わってしまいそうな、平和が少し離れてしまいそうな、そ

んな不安な今、この場所に来ることができてよかったです。今一度、ちひろさんみたいな方がいたことを胸にがんばれます。絵、風景、お人柄すべてにいやされました。

11月6日(木)

司修さんの展示が本当に本当にすばらしかったです。『まちゃんと』の原画を拝見できたこと、そして司さんの考え、思いを知ることができ、感動しました。自分のこともふり返りながら作品を見ました。司さんが心に大きな悲しみ、苦しみを抱えながらなお作品をつくり続ける姿勢に勇気をもらいました。子どもたちや弱い人を苦しめる世界にNOをいえる大人になれたのは、幼いころ、司さんの絵本を読んだからだと思います。ありがとうございました。

美術館
日記

8月3日(日) ☀



インドネシア・ジョグジャカルタでの、展覧会「TANEM-TANEMAKI EXHIBITION」*1最終日(7月26日〜)。当館からは、いわさきちひろを含む日本の絵本12冊のピエゾグラフを展示した。会期中にはギャラリーツアー、絵本の読み聞かせ、水彩技法ワークショップのほか、日本から紙芝居文化の会の野坂悦子さんを招聘し、紙芝居講座を実施。国や文化を越え、「子どもたちのしあわせや、豊かな感性を培ってほしい」という思いを共有し、参加者やスタッフが互いの文化理解を深め、自分たちの活動

にも繋げる交流の場となった。

9月6日(土) ☀

インドネシアの「スケッチの王様」イペ・マルフを紹介するイベントを開催。バンドン工科大学のリアマ准教授や絵本画家エヴェリンによるトークや詩の朗読、絵本の紹介、質疑などを通じて、インドネシアの文化や絵本への理解と関心が深まった。

11月3日(月・祝) ☀/☁

当館常任顧問で、ちひろのひとり息子である松本猛が、新刊『絵本とは何か一起源から表現の可能性まで』(岩波書店)の内容を中心に講演。ロングセラー絵本の秘密や、絵本の絵の読み方、絵とテキストの関係性、絵本の歴史などについてお話した。参加者からは、「絵本の見方、読み方が、このような深い意味を持って構成されて

いることに、感動しました。」などの感想が寄せられた。

11月9日(日) ☂

展覧会「ちひろ 本を読む人 描く人」に関連して、「あなたの好きな絵本」を募集する企画を実施。会期中に寄せられた約170のエピソードや思いに心があたたくなる。

11月10日(月) ☀/☂



屋根の改修工事のため、2025年は、今日から冬期休館に入る。早速、足場が組み立てられ、屋根の資材を吊り上げる大型クレーンも設置される。雪が積もる前に、工事が無事に終わることを願う。



*1 子どもたちのための芸術を祝うインドネシアと日本のアーティストによる交流展

新収蔵
作品介绍13

いわさきちひろ
『トッパンのえほん
童謡絵本』
『トッパンのベビー
・ブック』

昨年6月、「キンダーブック」などを発行するフレーベル館より、『トッパンのえほん 童謡絵本』や『トッパンのベビー・ブック』に掲載されたちひろの原画12点が返却されました。刊行年は不詳ですが、フレーベル館は1961年にトッパンの出版部を合併しており、画風からも1960年代前半に描かれた可能性が高いと考えられます。



「ゆりかごのうた」(図1)は、

北原白秋の童謡(1921年)がテーマです。「ゆりかごの うたを/かなりやが うたうよ/ねんねこねんねこ/ねんねこよ」で始まる詩のやさしい響きとともに、安らかに眠るあかちゃんの寝顔が幸福感に満ちた子守唄の世界へとといざないます。詩のなかに登場する、ピワの実や木ねずみ(リス)、黄色い月があかちゃんを見守るように配置され、細部まで丁寧に描きこまれています。

「まりちゃんときゅーピーさん」(図2)では、女の子がキューピー人形と散歩やおやつを楽しみ、お風呂で世話する愛らしいすがすがしく描かれています。

キューピー人形は大正期に輸

入されて以



来、子どもたちの人気者になりました。1924年に葛原しげるが「キューピーさん」を、1930年には野口雨情が「コドモノクニ」誌上で「キューピーちゃん」を発表します。今回の新収蔵作品とは別に、『トッパンのえほん 童謡絵本』の葛原版「キューピーさん」に添えられたちひろの原画も残されています。童謡の名曲が生まれた大正期から昭和初期は1918年生まれの子ひろの少女時代と重なります。(山田実穂)

図1 「ゆりかごのうた」1960年代前半 『トッパンのえほん 童謡絵本6』(フレーベル館)

図2 「まりちゃんときゅーピーさん」1965年頃 『トッパンのベビー・ブック13』(フレーベル館)

●次回展示予定 2026年6月12日(金)～9月6日(日)

〈展示室1・2〉

トットちゃん広場10周年記念展
「みんな、いっしょだよ。」

安曇野ちひろ美術館に隣接する安曇野ちひろ公園(松川村営)のトットちゃん広場オープン10周年を記念して、いわさきちひろの絵で愛される黒柳徹子の自伝的物語『窓ぎわのトットちゃん』(講談社)の魅力を紹介します。



いわさきちひろ 朝顔と3人の子どもたち 1970年頃

〈展示室3〉

ちひろ美術館コレクション 星の下の物語

〈展示室4〉

ようこそ! ザ・キャビンカンパニー新収蔵作品展
ーがっこうにまにあわない・ゆうやけにとけていくー

大分出身の阿部健太郎(1989-)と吉岡紗希(1988-)のふたりによるユニット「ザ・キャビンカンパニー」。本展では新規収蔵作品である絵本『がっこうにまにあわない』(あかね書房)と『ゆうやけにとけていく』(小学館)を、資料も交えて展示します。



ザ・キャビンカンパニー『ゆうやけにとけていく』(小学館)より 2023年

安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。

掲載内容は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問合せ下さい。

TEL.0261-62-0772 chihiro.jp



〈展覧会関連イベント〉

●松本猛スライドトーク ちひろと旅する信州

○日時: 3月22日(日) 14:00~15:30
○講師: 松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
○参加費: 会場500円(入館料別)・オンライン500円
○会場: 安曇野ちひろ美術館
○定員: 会場40名、オンライン100名
○申し込み: 要事前予約(公式サイト/TEL./Peatixにて)
いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるスライドトークです。作品や写真のスライドを見ながら、母・ちひろとの思い出や、信州で生まれた作品の背景、展示の見どころについて語ります。

●開館記念日&ヴィルコンデー

4/19(日)は、安曇野ちひろ美術館の開館記念日とポーランドを代表する絵本画家ユゼフ・ヴィルコンを紹介する特別イベント「ヴィルコンデー」。当日ご来館の方全員に、ちひろのポストカード(非売品)をプレゼント。
○日時: 4月19日(日)
○11:30~12:00 ユゼフ・ヴィルコンの絵本の読み聞かせ 定員: 20名
○14:00~15:00 松本猛による ユゼフ・ヴィルコン展 ギャラリートーク 定員: 20名
○15:30~/16:15~ 短編映画上映会「ヴィルコン88」(2017年制作/26分) 定員: 30名
○参加費: 無料(入館料別)/申し込み: 不要

●松本猛ギャラリートーク ちひろ 心のふるさと 信州

○日時: 5月24日(日) 14:00~15:00
○講師: 松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
○参加費: 無料(入館料別) ○定員: 20名 ○申し込み: 不要

●ギャラリートーク

○日時: 3月21日(土)、4月18日(土)、5月16日(土) 14:00~ちひろ展 14:30~ヴィルコン展
○参加費: 無料(入館料別) ○定員: 20名 ○申し込み: 不要
開催中の展覧会の見どころを学芸員がわかりやすく解説します。

〈会期中のイベント〉

●あかちゃんとおでかけしよう!
ファーストミュージアムデー

○日時: 4月12日(日) 10:00~11:00
○参加費: 無料(入館料別)
○定員: 親子10組
○対象: 0~2歳児と保護者
○申し込み: 要事前予約(公式サイト/TEL.にて)
あかちゃん絵本の読み聞かせや展覧会のギャラリーツアーを親子で楽しみましょう。



●ちいさなおはなしの会 at 絵本カフェ

○日時: 3月29日(日) 11:00~
○参加費: 無料(入館料別) ○定員: 20名 ○申し込み: 不要
絵本カフェにて、絵本の読み聞かせを楽しみましょう。

●絵本のじかん

○日時: 3月7日(土)、4月4日(土)、5月2日(土) 11:30~12:00
○参加費: 無料(入館料別) ○定員: 20名 ○申し込み: 不要
絵本の読み聞かせを行います。あかちゃんから大人まで、どなたでもご参加いただけます。

安曇野ちひろ公園 イベント

●まつかわ花咲きまつり

ちひろの作品を色とりどりのパンジーで表現する地上絵や、パンジーの即売会、マルシェも開催します。
日時: 3月22日(日) 9:30~15:00
会場: 安曇野ちひろ公園
問い合わせ先: 松川村役場経済課商工観光係 TEL.0261-62-3109



いわさきちひろ はなぐるま 1967年

●開館情報

○開館時間: 10:00~17:00
※GW(4/25~5/6)は9:00~17:00
○休館日: 第2・4水曜日 ※GW(4/25~5/6)は無休

CONTENTS 〈展示紹介〉ちひろ 心のふるさと 信州…②/96才、画家。ユゼフ・ヴィルコン。ーポーランドの巨匠ー…③ /ちひろ美術館コレクション 世界に生きる動物たち / 〈活動報告〉司修 講演会「ヒロシマとトット」…④ /ひとことふたことみこと / 美術館日記 / 新収蔵作品紹介⑩…⑤

美術館だより NO.119 発行2026年2月16日